

の出身地としては不確定ながら旧京都郡・旧仲津郡で古墳時代の後期後半から終末期に向けて大型古墳の分布する勝山地区（旧京都郡）と豊津地区（旧仲津郡）が特に注目されよう。

### 仏教の伝播

次に文化の面では、この地方への仏教文化の伝播と豊前分寺の建立が挙げられる。この地方で最初に寺院が建立され始めたのは七世紀の終わりごろから八世紀の初めにかけてであり、このころの寺院として椿市廃寺（行橋市福丸）・上坂廃寺（豊津町上坂）・木山廢寺（犀川町木山）がある。これらの寺院はこの地方の有力な豪族によって建てられた私寺であるが、特にこれら初期の寺院に算かされている屋瓦の文様には朝鮮半島の国々（百濟・新羅・高句麗）の影響を受けたものが見られる。大宝二年の豊前国の戸籍（正倉院文書）の断片には中央の秦氏の部民として位置づけられた渡来系の人々が多く割合を占めており、大陸と一衣帯水という地理的な条件から言っても特に豊前地方は大陸からの渡来系の人々の活動が盛んであり、地域の開発に大きくかわったものと考えられている。

### 豊前分寺の建立

奈良時代の中ごろになって鎮護国家の仏教政策から全国の国ごとに国分寺が建立されるが、豊前国では豊前国府に程近い錦原台地の東端（現豊津町国分）に建立された。鎮護国家の道場としての国分寺は一般の農民と密着した寺院ではないにしても、それに先立って建立された豪族の私寺も含めて、この地方に大陸を源流とする総合文化としての仏教が持ち込まれたことの意義は極めて大きい。

### 班田収授と農民

次に班田収授の実施に伴って、この地方でも土地の区画整理（条里制）が行われるが、京都・行橋

の各地域にもその遺構が残存しており、また小字名でも条里を確認することができる。最近この地方でも古墳時代の終わりごろから奈良時代にかけての農民層の住居跡が出土しているが、方形一間の竪穴式住居であり、「竈」の設けられた住居内からはわずかの土師器・須恵器などが発見されるだけであり、租・庸・調に苦しむこのころの貧しい農民の姿を彷彿とさせるものがある。（第10表、第18図参照）

## 第二節 古代の郷土

### 一 謎に包まれた神籠石山城

#### 雄大な古代山城

犀川町の北東部にそびえるホトギ山（二四六呎）の山頂から中腹にかけて二つの谷を取り囲むように延々と数キロにわたって切石の石列・土塁が見られ、それには所々に門や谷部には水門が設けられている。この遺構の主要部分は行橋市側にあるが、一部は西側で勝山町に、南側で犀川町に入り込む。

この石囲みの遺構のある一帯は、いわゆる景行天皇が九州巡幸の際に長峽県に行宮を建てて滞在したという『日本書紀』の記事に関連させて、その行宮の所在地に比定する幾つかの意見も見られたが、明治以降は一般的には御所ヶ谷の神籠石という名で呼ばれてきた。この神籠石を含めて、この遺構のもつ性格・築造年代などについては、明治時代よりさまざまな論議が展開されてきたが、発掘の成果や朝鮮式山城との比較検討などによって古代の山城としての決着を見ており、神籠石山城・



相 違 点	共 通 点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・倉庫群がある</li> <li>・城門に礎石を使う</li> <li>・瓦が出土する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山丘の利用が基本計画で同じ</li> <li>・土塁を積み重ねる（尾根の稜線より少し下がったところ）</li> <li>・城門を作る</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・年代がはっきりしない</li> <li>・包谷式に属する</li> <li>・土塁の裾に列石を置く</li> <li>・倉庫群が見られない</li> <li>・城門に礎石が見られない</li> <li>・瓦が出土しない</li> <li>・列石全面に柵列がある</li> <li>・朝鮮式山城より、造りが丁寧である</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文献に年代がでる</li> <li>・比較的高いところに鉢巻式</li> <li>・列石を使わない</li> </ul>

**御所ヶ谷神籠石の踏査** 御所ヶ谷神籠石については、明治時代終わりごろから現地踏査が行われ始めて、次第に列石や門跡などの

実態が明らかになってきている。『京都郡誌』の編者である伊東尾四郎氏は十数回に及ぶ踏査によって明治四十一年（一九〇八）に初めて神籠石の列石を発見し、『歴史地理』第十一巻第五号（明治四十一年発行）に「豊前京都郡の神籠石及石門に就きて」という一文を載せ、その中で「…東門に向ふ、偶ま路傍に石垣の長さ一間ばかり露出せるものあるを見る、就きてこれを検するに所謂神籠石にして、試みに唐鍬を以て傍の土壌を掘り行けば、同様の石連続せり、覚えず快哉を呼び、直に撮影す、是に於て生は始めて御所ヶ谷付近に神籠石あることを確かむることを得たり」と書いている。

ついで明治四十三年の元旦には文学博士喜田貞吉氏・伊東尾四郎氏ら五人が踏査しているが、同行者の一人であった宮崎栄雅氏が『歴史地

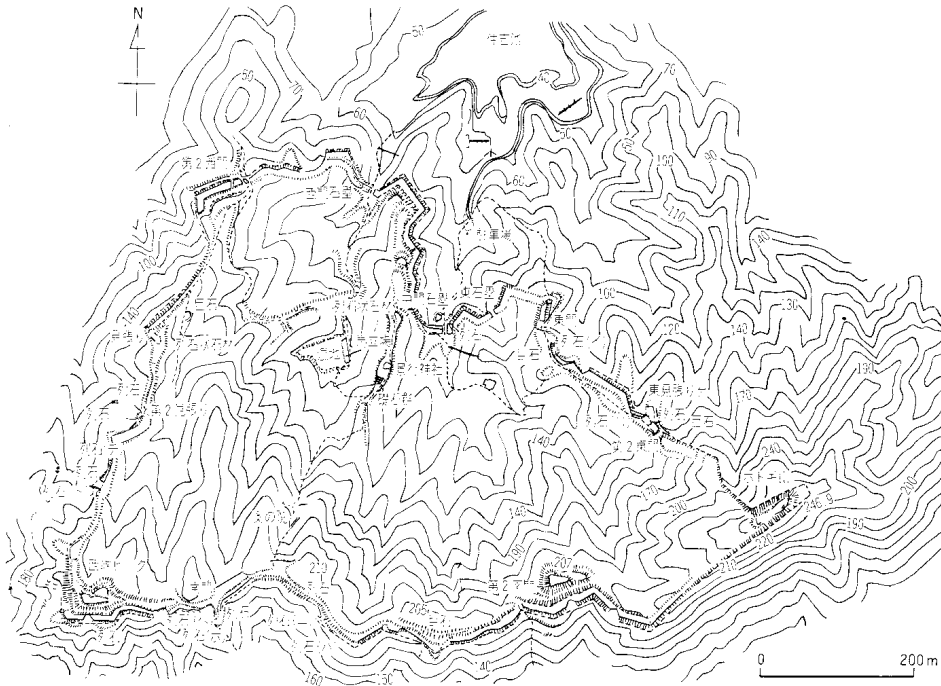
理』第十五巻第三号（明治四十三年発行）に「豊前御所ヶ谷神籠石探検記」を載せている。その中で「…御所ヶ谷神籠石は純然たる神籠石なりと断定し得べく、其規模に於いては石城山のそれにも優りて、雄大の風あり」とし、さらに「古代の遺蹟研究に趣味を有せる特学の士は奮って实地踏査を試みられ、学界に意見を發表せられんことを望む」とも書いている。

なお、喜田氏は靈城説をとなたが、伊東氏は「石門と神籠石は…同一目的を以て築造されしものにして、唯地勢より一は単に一列に並べ、一は峻然たる石門を据えしものと解するに至れり、即ち所謂神籠石も石門と同じく防御の為に築造せられしものと信ず」として、列石と各門とが神籠石として一体化したものであるという考えには至っていないものの、山城説をとなたしている。その後、多くの研究者が御所ヶ谷を探索しているが、特に第二次大戦後は地元の家定村責二氏が精力的に踏査を重ねて列石の発見に努めた。

**御所ヶ谷神籠石** 先にも述べたように馬ヶ嶽連山の主峰ホトギ山の西北部に位置する。列石をとまなう土塁線は全長

約3キロにも及ぶと推定され、東西にやや長い三角形をして谷を囲む。平成三年（一九九二）に向井一雄氏らの新発見のものを加えて現在七か所の門跡（東門・第二東門・中門・西門・第二西門・南門・第二南門）が確認されているが、中門と西門は谷部を石塁で塞いでいる。中門は残存状態がよく、高さ六・五×七・五、長さ一八の二段築成で、中央部には水門が設けられており、城門壁が両側に残る。門幅は約六を測る。西門は中央部が大きく崩落していて、城門の有無は不明である。また、中門と西門とは石積み法が異なる。推定される外郭線の大部分には土塁

第2図 御所ヶ谷山城 遺構平面図



(向井一雄氏作成1992.1.31 行橋市都市計画図1/2,500を利用)

がよく残存しているが、中門と東門の間をはじめ、所々に土塁下部の石列が露出している。

現在まで山城内からは建物跡などは発見されておらず、中門西側尾根上にある三間×四間の一棟の総柱礎石群は性格不明である。また中門の南約一〇〇坪にある広場から土師器片が採集されているが、山城との関係を明らかにできるものではない。現在行橋市は平成四年度からこの神籠石山城の整備計画を策定中であり、今後本格的な発掘調査が行われることになれば、山城の謎を解明する手掛かりが得られるのではないかと期待される。

御所ヶ谷神籠石山城の築造時期については、小田富士雄氏は西門の石積みが重箱積みであり、これがここから北西三・五メートルのところにある終末期巨石古墳の綾塚・橋塚古墳(京都郡勝山町)の石積みと類似していることに着目して「この神籠石の年代をつかまえていく一つの手掛かりがあるのではないかと思う」と述べている。

ところで、このように急峻な山頂部から山腹にかけて尾根から谷へと約三メートルに及ぶ列石と土塁・石門を築く作業は、石の切り出し・加工・運搬・構築、土砂の運搬と版築、材木の伐採・運搬などを伴う大土木工事であり、優れた石工技術と膨大な労働力を必要としたはずである。

したがって、このような技術者の確保と労働力の徴発や使役には、それを組織するための強力な「力」の存在が不可欠と考えられる。

築造の目的に諸説があるにせよ、築造の時期を七世紀の中ごろから後半に推定するとき、大化改新後の中央集権国家の成立期における大和朝廷の防衛政策の下で、この山城の築造に対してはホトギ山を囲むこの地方の豪族や農民が深くかかわったことはもちろんとして、さらにその範



写真1 御所ヶ谷神籠石西門（一部）

（行橋市教育委員会提供）



写真2 御所ヶ谷神籠石中門（水門）

（行橋市教育委員会提供）

開を広く越えて大勢の人々が駆り出され、この大土木工事に携わったことを想像させる。

## 二 古代仏教と木山廃寺

**仏教の伝来** 大和朝廷に朝鮮半島の百済国から仏教が伝えられたのと広がり はふつう宣化三年（五三八）とされているが、百済の

聖明王が朝廷に釈迦像・幡・經典などを贈ったことを指している。その後日本では仏教の受容をめぐって、大和朝廷の有力豪族の間ではそれを受け入れようとする奉仏派の蘇我氏と他国神としてあくまでそれを受け入れまいとする反仏派の物部氏・中臣氏との間で争いが繰り広げられている。しかし、用明二年（五八七）物部氏が滅ぼされたあと、崇峻元年（五八八）には蘇我氏によって日本最初の本格的な寺院である飛鳥寺（法興寺）が飛鳥の地に建立され始めた。さらに推古二年（五九四）に推古天皇の摂政であった聖徳太子から蘇我馬子に仏教興隆の詔が出されるに及んで、中央の豪族たちも競って寺院の建立を始めたことと伝えており、仏教が近畿地方を中心に次第に広がりを見せ始めたことを物語っている。

・推古三十二年（六二四）の僧・尼数：僧 八一六人、尼 五六九人  
・推古朝（五九三～六二八）の寺院数：七国に四六寺（大和・備中）

※ 飛鳥時代の終わりには八〇寺近くになる

大化の改新といわれる大化元年（六四五）仏法興隆の詔が出されたあと、天武朝から持統朝に推移する間には国家の仏教政策として、官寺の建立・僧尼の統制などがすすめられていくが、天武十四年（六八五）に次のような詔が出されている。

「詔、諸国每家、作仏舎、乃置仏像及経、以礼拝供養」

（詔したまはく、国々に、家毎に、仏のおほのを作りて、乃ち仏のみ

かた及び経を置きて、礼拝供養せよ）

家毎という言葉が家宅説・寺院説で争われてはいるが、このようなことから仏教の地方への普及が推進されて全国各地に寺院の建立がすすめられるが、一方では次第に仏教が鎮護国家（国家の平安・隆平・安寧、五穀成熟、病氣退散）のために利用されていくようになる。

**豊前地方への 仏教が伝来して一五〇年ほどたった七世紀の後半に**

**仏教の伝播** かつて九州北東部の豊前地方にも堂や塔などを備えた寺院の建築が始められる。それは天武・持統朝においての国家による仏教政策と密接なかわりを持っている。しかしこの地方への仏教の伝来については百済から仏教が伝えられる（仏教の公伝）前に、既に朝鮮半島からの渡来人によってもたらされ（仏教の私伝）、私宅に仏像を安置して礼拝していたという意見があり、草堂仏教という呼びかたがなされている。大宝二年（七〇二）の豊前国戸籍（正倉院文書）の残簡には多くの渡来系の人々の名前が見られることからすれば、公伝前の仏教の私的な伝来のあったことは十分に考えられるところである。

ところで豊前地方に白鳳時代から奈良時代にかけて建立されたと考えられている寺院遺跡は、現在までの調査では一三遺跡を数えるが、それらが既に廃絶してしまっていることから、廃寺と呼ばれている。（第3図参照）

### 木山廃寺

犀川町の古代寺院としては木山廃寺がある。木山集落の南側で、今川の支流である松坂川をつくった扇状地の低丘陵上に位置する。この廃寺の遺構は明治九年（一八七六）ごろの